柳宗元「江雪」確認テスト（漢詩）｜定期テスト対策｜誰でも古典塾　解答・解説

問1 五言絶句／一句が五字（漢字五文字）で、全体が四句から成る詩なので「五言絶句」である。（一句の字数が五字＝「五言」、句の数が四句＝「絶句」。）

問2 唐／柳宗元（七七三〜八一九）は中国・唐代中期の詩人・文章家である。

問3 絶・滅・雪

問4 五言の詩（五言絶句）では、ふつう偶数句の末字、すなわち第二句末と第四句末で韻を踏む（第一句末は韻を踏まないのが原則）。ところが「江雪」では、第二句末「滅」・第四句末「雪」に加えて第一句末「絶」でも韻を踏んでおり、第一・二・四句の三つの句末すべてで押韻している点が特徴である。（絶・滅・雪はいずれも入声の韻で、響きをそろえている。）

問5 千・万・孤・独（「千万孤独」と読める。＝この上ない孤独、と解されることがある。）

問6 「江雪」は、鳥も人も絶え、漁翁が「独り」静止して釣りをするという、動きの乏しい静寂の世界を描く。一方「登鸛鵲楼」は、太陽が山に沈み、黄河が海へと流れ込み、人が楼を上っていくという、雄大な動きやスケールの大きい運動を描いている。前者が「静」、後者が「動」（雄大・躍動）と対照的である。

問7 イ

問8 （第一句）多くの山々には、鳥の飛ぶ姿もすっかり絶えてしまい。

問9 「千」「万」とも、正確な数を表しているのではなく、「数えきれないほど多い」ことを表している（誇張的・概数的な表現）。「千山」は「見渡すかぎりの多くの山々」、「万径」は「無数の小道」の意。

問10 (1) 対句（ついく）。
(2) 「鳥飛」と「人蹤」（鳥の飛ぶ姿／人の足跡）。〔「千山」と「万径」、「絶」と「滅」のほかに、「鳥飛」と「人蹤」が対応している。〕

問11 （第二句）無数の小道からは、人の足跡も消えてなくなってしまった。

問12 人の足跡（人が通った跡）。「蹤」は「踪」とも書き、あしあとの意。

問13 （第三句）ぽつんと浮かぶ一艘の小舟に、蓑（みの）と笠（かさ）を身につけた老人がいて。

問14 蓑（みの）と笠（かさ）。雨や雪を防ぐためにまとう、わら製などの雨具・かぶり物の二つ。

問15 （第四句）雪の降る寒々とした川で、その老人がたった一人、釣り糸を垂れている。

問16 「独」は「ただ一人で」の意で、広大で人気のない雪の世界の中に漁翁がたった一人だけいるという、極限の孤独・静寂を強調している。同時に、その孤独の中でも平然と釣りを続ける人物の超然とした姿を際立たせる。

問17 五言絶句（一句五字・全四句）。

問18 （訳）はるか千里の彼方まで見尽くそうと思って、さらにもう一階分、高い楼に上る。／（教訓）より遠く広い眺め（より高い境地・よりよいもの）を得ようとするなら、一段でも高い所へ上る努力を重ねなければならない、ということ。向上のためには一層の努力が必要だという前向きな教えが込められている。

問19 前半二句（第一・二句）は、鳥も人も絶えた、生き物の気配のない広大な雪景色（背景となる世界全体）を描いている。後半二句（第三・四句）は、その中にぽつんといる蓑笠の老人が独り釣りをする姿（一点の人物）を描いている。＝広い遠景から一点の人物へと焦点が絞られていく構成。

問20 鳥の姿も人の足跡も消え、物音ひとつしない雪の世界が広がっており、一面の**静寂**に包まれた、しんと静まりかえった情景である。その静寂を破るものは何もなく、ただ一人の漁翁の姿だけが置かれている。

問21 鳥も人も絶えた極寒の世界に動じることなく、たった一人で静かに釣りを続ける漁翁の姿に、世間から隔絶されてもなお信念を曲げず超然としている、**孤高**で気高い人物像（と、それに自らを重ねた作者の心境）が表現されている。

問22 韓愈（かんゆ）。柳宗元とともに唐代古文復興運動の中心となり、二人は「韓柳」と並称される。